

Y17a 天文学と他分野とのコラボレーションで探る新たな天文普及の可能性

松本美帆，波田野聡美（国立天文台）

近年、科学コミュニケーション関連の国際会議において、天文学と他分野を掛け合わせたイベントの報告が散見されるようになり、世界的にも新しい天文普及の潮流となりつつある。2024年11月3日、国立天文台は、国立天文台三鷹移転100周年を記念し、「天文学×現代アート100年の宇宙（そら）見つめる眼・歌う声」を開催した。1926年に竣工した、天文台歴史館（大赤道儀室）を舞台に、100年前、現在、未来へと続く天文学について、国立天文台の天文学者（石垣美歩）が語り、声のアーティスト・美術家（山崎阿弥）が自らの声によるパフォーマンスで表現する。本イベントでは、天文学と異なる分野を掛け合わせたイベントを実施することで、今まで、星・宇宙・天文学に馴染みの無かった「新たなターゲット層」の取り込みを狙った。メインテーマは、「私たちはどこから来たのか、私たちは何者なのか、私たちはどこへいくのか」に象徴される宇宙の歴史である。これは石垣の研究領域である元素合成・天の川銀河形成史にも親和性の高いもので、さらに、古来より天文学が挑み続けるこの謎は、人類の根源的な問いでもあり、ターゲット層の心にも響くことが期待された。

一般に、アート×サイエンスのイベントでは、研究者はアーティストにインスパイアを与えはしても作品の制作については関わらず、アーティストが単独で担う事が常であろう。本イベントでは、研究者とアーティストによる一年を超える対話を通じ、科学的・理論的なアプローチを経て、パフォーマンスが作り上げられた。また、暗闇の中で音のみによるパフォーマンスを行ったことも、特徴的かつ斬新な試みであった。参加者へのアンケート結果等の分析により、ターゲット層へのリーチ度、実施した広報手法の効果、参加者満足度の測定を実施し、検証を通して今後の天文学×他分野の企画の広報普及の可能性を考察する。